

巻頭言 精神医学研究における「未来のあたりまえ」 ～「リカバリーの研究」と「研究のリカバリー」～

笠井 清登

東京大学大学院医学系研究科精神医学

5年ほど前に書かせていただいた巻頭言を読み返してみました。精神医学研究を進めるうえでの神経科学者との連携や、若手研究者育成の必要性についてその頃取り組んでいたこと、考えていたことを書いていました。この5年間で十分取り組めたこともそうでないこともありました。「未来のあたりまえ」を予測できたことも、そうでなく今では考えが変わってしまった部分もありました。いずれにしても、今実行していることや、これから重要になるだろうと考えていることを言語化・意識化して、「未来のあたりまえ」を少しでも早く実現していくことが私たちの責務なのでしょう。

今、私が今後の精神医学研究について大事だと思っていることは、「リカバリーの研究」と「研究のリカバリー」です。

まず、「リカバリーの研究」についてです。近年、医療のアウトカムとして、従来の生存率や客観的な症候の軽減・消失ではなく、主観的な patient-reported outcome (PRO) が重視されるようになってきています。精神科医療においても、症状や客観的適応状態などの臨床的アウトカムではなく、主観的ウェルビーイング (subjective well-being) や人としてのリカバリー (personal recovery) の重視が、当事者の立場から主張されるようになってきました。人としてのリカバリーという主観的アウトカムは、では脳科学・生物学的精神医学の対象外なのでしょうか。いや、そうではない、と考えています。人は、一人ひとり他者とは違う個別の人生を生きています。これを駆り立てている個体内因子を、脳科学・心理学的構成概念として想定し、「主体価値」 (personalized value) と呼ぶことにします。ここでいう価値とは、対象側の価値ではなく、個体側の長期的行動の駆動因です。また、この価値が言語化・意識化された部分を価値観と一般に呼びますが、価値は、意識されない部分を含む概念です。親や社会から継承された価値はしだいに個人のなかに内在化していき、他者とは異なる個別化された価値となり、これをもとに社会に向かって能動的に働きかけていけるようになります (価値の主体化)。こうして人は、主体価値に基づいて長期的な人生を歩んでいきます。精神疾患におけるリカバリーとは、病気の影響で混乱し見失いがちになっている主体価値を、病気の経験を踏まえて建て直し、あらたな形として発展させるプロセスといえます。こうして精神疾患の研究は、主体価値・リカバリーの脳科学として捉えなおすことができるのではないのでしょうか¹⁾。私たち東京大学精神医学教室では

リカバリー研究プロジェクトを、Foresight research project on Life-And Value-Oriented Recovery (FLAVOR) というキャッチフレーズで進めています。

次に、「研究のリカバリー」についてです。上述のように「リカバリーの研究」を進めていくには、当事者・家族の主観・ナラティブや、彼らの一回性で個別の人生に寄り添い、そこから普遍性を見いだしていくプロセスが必要になります。従来の研究は、主観的で統計学的実証の不可能な事象をエビデンスとみなさず、検討対象としてきませんでした。しかし今後もそのままではよいのでしょうか。当事者や家族の個別の人生の語り³⁾こそ、精神医学の研究成果の体現⁴⁾ともいえるのです。このように研究を、当事者・家族と共同創造 (co-production) していくパラダイムシフトを、「研究のリカバリー」と呼びたいと思います。これにより、ひいては「学会のリカバリー」も目指せるものと思います。私たちは最近、心奇形などの重い身体疾患、知的障害を先天的に有し、かつ精神障害を思春期以降に高率に合併する 22q11.2 欠失症候群の当事者・家族とのお付き合いをさせていただいています。こうしたプロセスを通じて、当事者・家族の望む研究、「研究の民主化」⁵⁾とは何か、ということを考えていきたいと思っています。

このたび、「医学のあゆみ」という一般医学雑誌に統合失調症の特集号を組む機会をいただきました²⁾。「リカバリーの研究」と「研究のリカバリー」が医学において「未来のあたりまえ」になることを願い、精神医学は「医学のリカバリー」を先導しているとの自負をこめて。

文 献

- 1) Kasai K and Fukuda M (2017) Science of recovery in schizophrenia research : brain and psychological substrates of personalized value. NPJ Schizophr, 3 : 14.
- 2) 笠井清登, 宮本有紀, 福田正人 (2017) 統合失調症 UPDATE—脳・生活・人生の統合的理解にもとづく「価値医学」の最前線. 医学のあゆみ, 261 (10).
- 3) 島本禎子 (2017) 支援の原点—家族の視点から, 家族として人として. 医学のあゆみ, 261 : 935-940.
- 4) 福田正人 (2017) 統合失調症について一般医・研究医に知ってほしいこと. 医学のあゆみ, 261 : 917-924.
- 5) Lloyd K and White J (2011) Democratizing clinical research. Nature, 474 : 277-278.